

「庚辰の年」について

吉 永 登

万葉集に引かれている「柿本朝臣人麿歌集」については、近來種々な角度から論じられるようになって来た。その一つに土居光知氏の説がある。

氏は、まず七夕の歌をよむことは、人麿の死後、新羅朝の山上憶良によって初められたものである。したがって、青年時代の作品を中心に、彼自らによって集められたといわれている「人麿歌集」に七夕の歌のあるのはどうしたことであろうかと疑い、さらに

そして人麿歌集中の七夕歌群の最後の歌は

天漢安の川原に定まりて神の競は時待たなくに（巻十、二〇三

三）……定而神競者磨待無（この一首は庚辰の年之を作れり）

である。左註にある「庚辰の年」は人麿の生きてゐた時代とすれば、六八〇年で斎藤茂吉の「柿本人麿」評釈篇卷之下四三六頁によれば天武天皇白鳳九年人麿十八歳の作であり、年代がはっきり知れてゐる、人麿の最初の歌に先立つこと九年である。天漢安の川原の歌は、意味の解釈にも異説があるが、歌の大意は、天の川、安の川原で神々が会合するには、一年に一度といふやうな定まり

がなく、いつでもできるのに――七夕星の遇ふには時が定められてゐるのが恨めしい、といふのであって、このやうに、七夕のことを言はずして、それとわかるには、七夕歌が多く詠まれた後でなければならぬ。しかるに六八〇年以後、四十三年間七夕の歌はなく、七二三年憶良が詠じ始めたとすれば、この庚辰は天平十二年（七四〇）を考えざるを得ない。（万葉集大成7、二五六頁）と論じている。従つて「人麿歌集」の最終的成立は、天平十二年以後であろうというのである。

二

ところで、人麿に七夕の歌がなかったということには問題があるとしても、「庚辰の年」を六八〇年とすれば、その頃に人麿が七夕の歌を作ったとすることは、たしかに無理なようである。そこに土居説の成立する可能性があるのであるが、だからといって、土居説が正しいときめてかかるには不安がないでもない。というのは、土居氏は問題の左註を持つ歌が、果して七夕の歌であるかどうかについて吟味をしていないからである。

問題の歌を含む三十八首の七夕の歌の中、明らかに七夕の歌でな

いと思われるものが数首ある。すなわち

吾恋ひを夫は知れるを行く船の過ぎて来べしや事も告げなむ

(巻十、一九九八)

あから引く色妙の子をしば見れば人妻ゆゑに吾恋ひぬべし

(一九九九)

の二首については、沢瀉久孝氏は何れも七夕の歌でないと断定しているし、また

夕星も通ふ天路を何時までか仰ぎて待たむ月人男

(二〇一〇)

のごときも、諸家は何れも七夕の歌でないとっている。どうして誤ったかの詮索は別にしても、三十八首中、たとえ数首にしても七夕の歌ならぬ歌が難っているとすれば、問題の歌についても、当然七夕の歌であるか否かの吟味を行うべきであろう。

三

問題の歌には、「神」の字が用いられている。このあたり、本當はどうよんでよいか明らかでないのであるが、最近の諸注はカミと訓んでいて、土居氏も例外でない。しかるに万葉集中には、彦星・織女を神として扱った例はないのである。

また、この歌には土居氏も「七夕のことを言はずしてそれとわかる」といつているように、直接七夕を思わせる表現は用いられていないようである。唯一の七夕に関わりのある「天漢」にしても、人麿が後年記録するにあたって、当時流行のきざしのあった七夕関係のこの語を、我が国古来の神話に見えるアマノカハに当てたと考えることも出来ないことはない。このことは、

……天の安の川原に神集ひ集ひて……(古事記、その成立は古いものがあろう。)

天の川安の川原は定而神競者磨待無(人麿)

……天の川原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして……

(巻二、一六七、人麿)

とならべてみても明らかで、問題の歌はどこまでも、七夕とは関わりのない神話に関するものらしく、それが却って神話に興味を持っていたと思われる人麿らしきを示すものといえそうである。

したがって、万葉集編者が、七夕の歌と誤った経路も

アマノカハ(神話の)↓天漢↓七夕

のように考えられるのである。

とにかく無批判にきめてかかることは危険である。万葉にかぎらないが、そこに問題があるのである。

——関西大学教授——

昭和三十九年度研究発表大会予告

日時 十月三日(土) 二時から

十月四日(日) 十時から

場所 明治大学大学院南講堂